

地理纂考

吟羅印

十六

					和書門
		二二八	八八	九九	類
二八	一一	二〇	二〇	二〇	類
冊	架	函	號	號	

庫文閣内				
毛	三	三	和	
函	二	八	書	
一	八	九		
三	八	九		
架	冊	號	類	

内閣文庫		
番號	和	22889
冊數	28 (16)	
函號	176	151



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





地理纂考十六之卷目錄

大隅國

始羅郡



高屋山上陵

神社

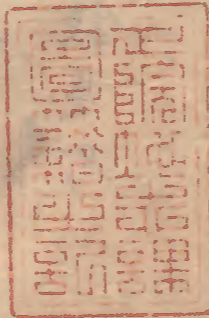
熊野神社

高松城

物産

加治木郷

丙 一一〇六六號



高屋神社

熊野神社

藏王神社

附長社神社

福玉神社

溝邊城

玉利城

曾我石

細掛川

細掛橋

澗標

黒川

加治木城

向陣

島津義弘治所

擬宝珠橋

實憲寺川原

是枝某門曾木某門

神馬屋敷

黒川奇墨

土畧園墨

葛原墨

藏王嶽

梅ヶ谷

春日神社

春日吉神社 雨之宮
荒人神社 若宮神社

春日川

高倉八幡神社

岩野原

江夏友賢墓

五老峯

上別府川

龍門司陶器

龍門瀑布

持城

樋廻砦

牧馬苑

錢屋町

物産

地理纂考十六之卷

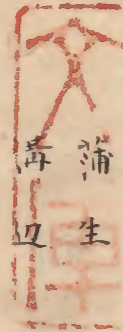
大隅國

始羅郡

續紀曰和銅六年夏四月乙未割日向國所杯贈於大隅始

羅四郡始置大隅國、見由東、同國素原郡西、薩摩國

鹿兒島郡小接、北菱刈郡小境以南、海小對、郡數六



蒲生 加治木 怡佐 重富 山田 不子 後世始の字を始小誤

郡名を始羅郡と号せ、莫大隅國總説小委、之辨

如、故不改、始羅郡と改稱、之改郡の古の

方域、東贈於郡西鹿兒島郡小境以北、菱刈郡小接、

丙一一〇六六號

南、海小連より人を後小贈於始羅の、西郡の箇小来原

郡を置きしより始羅郡、大、小、臨、少、り、今、古、の、半、小

過、り、不、な、り、宋原郡を置きし

溝邊郷

史、小、漏、り、り、河、云、之、酒、井、未、能、所、和、有、

鹿兒島を距る事子の方八里東襲山南國府加治木西山

田北横川五ヶ郷小接し周廻十三里二十六町五十三箇

村落五

有川村 麓村

三堀村 寄森村

竹子村

高四千四百六十六石

士族千二百二十六人

男五百七十一人 女五百五十六人

卒百三十八人

男七十二

平氏千九百八十四人

男千六十八人 女九百十六人

總人員三千

二百四十八人總戸數八百四十三

麓村

高屋山上陵

書紀曰炎火々出見尊崩葬日向高屋山上陵古事記曰日

子穗々手見余者坐高子穗宮云々御陵者即在其高子穗

山之西也延喜諸陵式曰高屋山上陵炎火々出見尊也在

日向國無陵戸々所是あり其山陵溝辺郷當村小あり

了俗小神割園々云々高六十間許あり頂圓々々八分

目々下漸々小大々々あり了根の周回十町許あり四

方山脉の接々所々無々曠野の中小獨立してふ々者

仰々む山々其形状山陵不々更知々池々々固々々高子

則今の高屋神社あり云々大誤也此地高千
穂山の南小下りて古事記小高千穂の西と云々小方角
筈ハ又國見の絶頂ハ山下りて三里小近と殊小登路
極とて險難ハ一て今ハ小容易と登りハ一況ハ神代
をハ斯ハ如ク所小莽奉_{マツ}ハ海と云々非_ハ又此地高屋と云
ハ地名ハ小非_ハ云々高屋の名ハ神代紀の一書炎火
々出見尊の降誕の条小_上凡_ハ此三子火不能害及母亦無
所ハ損時以竹刀截其兒胸其所棄竹刀終成竹林故號_レ彼
地曰竹屋云々云々始ハ一此地薩摩國加世田郡小
て魚戸室の田跡なり_{以事加世田郡}往古此地跡小神社ハ

て社号を高屋と稱へ同郷宮原村ハ高屋神社ハ
て候小祭神炎火々出見尊也是小因て按_レ此に降誕
ハ一地名を高屋と云ハ一_小就て後ハ一尊を齊祭_{イフキ}と
ハ社号を高屋と稱へ一ハ一始良郡ハ一_小固_レの地
名ハ一_ハ尊を莽奉_{マツ}ハ一_ハ名小負_ヘハ一_ハ爲_レハ一
ハ前皇廟後記ハ薩摩國阿多郡大隅國所屬郡候有鷹
屋蓋二郷相接恐_レ地之山_ハ云々大_ハ記_レハ阿多所
屬の兩郷相距_レ事数十里_ハ一_ハ其地更_ハ接_レハ一
ハ_ハ地理_ハ小_ハ和名鈔_ハ肝屬始良の郡の次第
錯簡_ハ多_ハを辨_レハ一_ハ故_ハあり_ハ云々_ハ此_ハハ_ハ山陵を

内之浦ふてと一萬誤、和名鈔小鷹屋と肝付郡小載
多り下り起きり鷹屋、肝付郡小非、始良郡なり其事
小委しと云へ参考をぬり元禄年中卜部兼連ら著せ不内之浦高屋
神社の縁起を視るに土人の傳説の終りて免角云ふ小
足り可溝田郷鷹屋神社小宝徳三年正保六年再奠の棟
札を納め又享保年中同郷の檢地帳小鷹屋社領麓村七
段七畝八歩有川村一段一畦同村二十五歩大宮司屋敷
八畦二歩内侍屋敷五畦權祝子五畦二歩と見え今心
神領其時の終り是れ已前文禄四年太閤秀吉公の余小
て溝田加治本日當山三个郷三ヶ郷皆の地一万石を公

田よりして石田三成を代官多しと見小因て領主肝付
兼固溝田を去てて薩摩國給黎に移り其後又慶禄四年
細川幽齋小命より寺社領の三ふ二を勘落りてうい
是等の時神領も多と翻つてむさろを享保年中の終小
社領も傳へて土人の口碑小上古の傳説もいふ、遺
をりと思へ、實地を世小知人ふと成り果し、彼唐陵
記の説の世小行いきりて以来の事をり為し、
頸と一、被内之浦ふり高屋、山陵の古書の趣小違へり
小就て真の山陵、異所ふりへ、年頃思ひりり山内、
時習田中頼庸官命を受け、母所被、取探、蒙るりて頸を
了ふりり鷹大明神と往年榊山資雄官命の同地小棟
了扁額小鷹大明神と往年榊山資雄官命の同地小棟
札をり見し小鷹屋と記したり一枚ありて猶山陵と

山尋向ハ一トモ更不知人あらてハをハラて以神
社ハ山陵ハ神割固ふてリ又肝付始良の郡力次第
錯簡多クを察明セハ高木香明ふて以三人の深き思
録小同て皆人多年の惑ハを一晴ハ解ハハ大不功小
ふむハ
り
る

高屋神社

奉祀 疫火之出見尊

例祭

山陵の南七町許小ハて上古山陵の頂小鎮坐ハてハ
云ハ迂坐ハ年月詳ハハハ地前面ハ水田ハて左右ハ
陸田或ハ人家あり後ハ固ハて大不ハ枚山ありハを近
年軍役の料小都て伐て除キ多ハ當社及ハ山陵ハ在所
小就て考ハハに鹿兒島神社ハ地ハ疫火之出見尊ハ皇

居の遺址ハてハ云ハ社傳ハ決て然ハハハ事都城高
千穂宮の卷小云ハハ

熊野神社

當村小ハて祭神紀伊國熊野神社ハ同ハ天正

十二年伴並寛造立の棟札を納む

一之宮

有川村小ハて祭神詳ハハ天正九年肝付並寛

地頭同苗若狭並盈造宮の棟札ハて二月初卯日十一月

中卯日を例祭とハ

藏王神社

寄森村小ハて奉祀薩摩國田布施郷金峯山藏

王神社小同ハ社傳小應永三十一年甲辰十一月十五日

建立奈と云ハ享徳二年又慶長十二年四月島津貴久

再奥の棟札を納む列祭二月初申日十一月中申日あり

○長社神社 藏王神社の傍ありて祭神詳ありて木像十六

体永禄五年霜月建立の棟札あり

熊野神社 麓村ありて天正十二年の棟札小奉建立熊野

十二所権現云々ありて

福五神社 三繩村ありて木像二体祭神詳ありて天文十年建

立の棟札あり

溝邊城 麓村ありて元弘の頃溝邊孫太郎居城ふり事跡

詳ありて舊記小曰延文三年二月畠山國明一説直頭加治木

郷土畚園小陣宮を構へ其執事野元藤次秀安怡佐萩原

城小在りて互小相授ひ國明進て島津氏又の執事本田

信濃重親の溝邊城を圍ひ氏久も又萩原城を圍てて兩

城互小危し時小國府郷八幡の大宮司和を畠山小求む

是小於て双方相約して圍を解とあり其後肝付越前魚

固代りて城主多り魚固の肝付元祖伴魚行りて十二世

高山城主肝付河内魚忠三男魚光子也魚光嫡庶不和小

して文明十三年高山を去り日向大寄城小徙りて守護

方小属り魚光卒りて同國志布志城主新納近江忠勝大

寄を任せ願り同十八年島津忠昌島津家十一代魚固の溝邊を

與へ當城小移りて子孫世襲り文禄四年豊臣秀吉公の

余亦て日當山

今の襲山あり

加治木溝辺三ヶ郷の中一万石の

地を官田と成りて石田三成を其代官と以て是れ同

年十月廿六日魚回ら後高を薩摩國給給移りふを

島津義弘朝鮮の軍功を賞して慶長四年正月再り回り

復せりふ

高松城 有川村小川了北原氏居城ありと云ふ三方ハ深

谷あり東の一方のみ僅小一線路通

玉利城 寄森村小川了城主詳ありと東の一面廣野小接

三方ハ深谷あり

曾我石 三繩村小川了土人相傳へて大磯虎女曾我五郎

時宗を追悼して六十余國小一國一基を建立せし其一

ふと云ふ外薩摩國鶴田郷ニ寺ノ跡及ハ大隅ニ菱ノ刈

郷黒坂寺の跡も曾我石あり共小由緒詳あり

物産

走獸 野猪 鹿

同郡

加治木郷

或ハ柁木ニ作る

鹿兒島縣廳より東北五里十八町東國府郷西重富帖佐

此兩郷戌亥山田溝邊ニ境と梅し南の一方海ニ對し周

廻十四里二十九町三間半村落六及土村 西別府村 本田村 小山田村

高井多村 高一萬百七十三石士族三千六百八十六人男

日本山村 九百七十九人 卒三百七十五人男二百九人 女 平民五千

女千七百七人 三百二十五人男二千七百七十九人 女 負惣計九千三百

八十六人戸敷二千百十七加治木此名義

土俗の訛に蛭兎命の乘り玉ひし天磐樟船此地ニ漂

着して其柁より蘗芽を生して大木と成りて故に往古
ハ柁木と書しよ志傳稱せり續日本詩選小當郷此名故
柁城と書て傍注リカキキと阿也此説國府郷奈氣木杜
の奈に詳あり

及土村

網掛川

網掛橋 此川同郷小山田村竜門瀧其外諸所より衆水會
流し爰に至りて稍大河なり往古漁人此河尔て地藏此
像と網掛引奉り故に其名を得たりと云ふ是に因
て其川小架せり橋と網掛橋と云ふ長二十五間余横幅

三間許小て始板橋なり近き年眼鏡橋と掛替へて石橋
ありしと洪水小崩せり今其跡に假に橋と掛あり橋よ
り下の水勢稍大にして舟楫出入を凡大隅菱刈或ハ日
向諸縣郡真幸院の人民鹿兒島に出る所を必を此地小
出て舟路を取るに故に往来繁く市中人煙繁榮あり
漣標 網掛川の海口遠干涸小して満潮此時も渚に舟を
寄せ舟のり以其中に網掛川の末流一筋深き其水
脈の諸所に大竹を建て舟船出入の標と云ふ漣標此ハ
助語にて水脈串なり延喜式雜式小凡難波津頭海中立
漣標若石臼標朽折者搜求抜去云々とあるハ舟の過ち

かららあめむら為あふべし

黒川 水源溝造郷より出當村と歴て海日入る海口と黒川
碕と云往古の領主河岸に櫻と多く植て櫻川と改む昔ハ
水勢多して舟船繫泊せしと云河の東岸小山の間に黒川
山と云其壻東南の海上小島し出怪高奇石峙又其岩隙に
清泉湧出し古松疎生して清幽愛をへし島津元久時代
足利將軍の使節淺山某鹿見島小来り此地と通行を領主
加治木某此所小棧敷と構へ淺山氏と饗せしと云又加治木
椿寛寺乃同山鳳山此地小小菴と結ひ老と養ひ鳳山軒と号次
島津家久鳳山と殊罷し毎遊覽のしと云

加治木城 今草称して本城又古城と云ふ本丸二丸三

丸向城高城松尾城新城等の名と分ち城門濠塹石垣等
の跡今尚存せり周廻九一里許西北ハ猶木川山下と廻
り南ハ巖壁のし高六十間許かり東ハ山野小連と堀
此跡のし此城建久年中島津忠久始て下向の時加治木
八郎親平城主と親平ハ本大藏姓の苗裔のし其始
ハ東漢靈帝の玄孫阿智王の子高貴王と云ひし者皇朝
に飯化して丹波國に住し醫博士とか久後に播磨國大
藏谷に封せり大藏と以て氏と次此家敷代加治木と
領し大藏良長と作らるる良依
と至りて嗣子かし良長卒して

室と肥喜山殿と云ふ一條天皇の寛弘三年関白藤原頼
忠公第三子宰相経平郷故のて加治木へ配流せり
経平郷遂に加治木に留り後に良長と室と娶り一説に
女あり肥喜山女房と号し良長此女と良長一
経平に配して家統を継ぐむと云ふ一子を生む藤太
夫経頼と云ふ大藏の家と嗣き氏と加治木と改む親平
より経頼迄九代あり加治木大和久平に至りて島津に
叛く明應四年乙卯七月島津忠昌兵と將て加治木と攻
む久平罪を謝と忠昌是を赦し久平を薩摩國阿多に移
して家臣伊地知周防重貞と地頭ありしむ重貞又反り
大永七年丁亥六月五日島津忠良是を討つ重貞其子新

左衛門重兼と共に城中小自殺是に因りて同年加治木
と肝付越前兼演に與ふ是より以前島津忠昌文明十八
年肝付越前兼固と始羅郡溝辺と與ふ兼固ハ大隅肝付
此領主伴兼俊より十一世の孫肝付河内兼忠の第三子
日向大崎比城主肝付三郎五郎兼光の子にして兼演ハ兼
固の子あり兼演の子彈正兼盛其子兼寛と云ふ兼寛嗣
かく伊集院幸侃の第三子三郎五郎兼三を後とて兼演
より兼三迄四世相續りて加治木城主より兼演天文三年
當城に移り同十七年兼演及び十八年五月島津貴久伊
集院忠朗と命して是を討しむ忠朗戦て兼演を敗り十

一月兼演罪を謝し降を乞ふ是に於て十九年四月再加
治木と與ふ二十三年初谷院入来院蒲生昭佐菱刈等此
城主悉く貴久に叛く所付兼盛蒲生範清を勸め共に初
谷院等の敵を討つに範清従ひ以初谷院入来院菱刈等
此兵を合せ同年八月範清當城を攻む兼盛防戦し家臣
多く戦死を九月貴久兵を祭し先陣竹佐の敵を破り是
に因て加治木の圍を解く兼盛子兼寛の嗣子兼三に至
り文禄四年豊太閣此命に依り封内諸所改易ありて加
治木湊辺日當山日當山今藝
山郷の内あり三个郷此内一萬石を天
領と成し石田三成を其代官たりしむ是に因りて同年

十月兼三を薩摩國喜入に移せりさるを島津義弘朝鮮
の軍功に依り慶長四年正月再び舊に復せり

向陣ムカウゼン

大永七年丁亥五月島津忠長加治木を攻む城主甲
地知周防重貞城を出て爰に陣を又天文十八年己酉五



月島津貴久伊集院大和忠朗に命じて所付兼演を退治
せしむ此時初谷院良重蒲生範清菱刈隆秋等所付を助
者共トモトモ此処に陣をよ云ふ此陣所に周防井戸と唱ふ
井水所を大永七年此役に伊地知周防重貞鑿せり井水
り故に其名を得たりと云ふ此地今段土村中園門農民宅
地あり

島津義弘治所 周廻一里許にて後ハ城山なり慶長十二年十一月義弘怡佐平松より平松ハ今京此処に移り元和五年己未七月二十一日此所に於て卒氏年八十五なり治所の東北方ニ中丸東丸と号し邸屋形此跡にて今方一町余虎落を結ひ松林と名せり其の西の方ニ故領主館あり島津家久の時造営ありて犀鹿兎島より此処ニ遊ひ今に其時比依也と云
擬室珠橋 治所の南一町許に河を義弘怡佐平松より此所ニ移りし時造立せりと云板橋あり朽損し柱のみ僅に残りしと領主第六代島津久徴石橋ニ改め固モト擬

室珠を用ひしと云ふ慶長十一年丙午三月吉日の銘あり是ニ因きハ怡佐より移りし前年此造立あり
寶窓寺川原 島津義弘元和五年己未七月二十一日加治木ニ於て逝去以家臣十三人殉死せし旧跡あり標ニ植る松樹ありしと其松枯て天明五年乙巳十二月六日旧領主島津久徴石燈一基を建立し燈明料と曰長年寺ニ寄附して毎夜燈明を燃さしむ殉死の姓名新納式部木脇刑部左衛門池田六左衛門原藏人山路後藤兵衛蒲牟田縫殿入枝佐五右衛門瀧田和泉藤井久助坂元番左衛門椎原與右衛門桐野治部左衛門色紙仲兵衛あり此

川原の雪窓寺と云ふ寺跡にて網掛橋の四十寸余あり
是枝某曾木某門 是枝某門の島津義久居城國府郷富之
隈此城の後門の義久是と山伏是枝存忠坊に與ふ具
子孫今に至り家門と云ふ高一間三尺許経一間許あり柱
の幅一尺余厚六七寸片戸にて引戸あり扉を束の一枚
板と用ふ木釘と用いて更小鉄釘と用ひて屋根の葺
おと曾木、門の義弘の時大手洗城門にて曾木某先祖
曾木播磨重公シキキ一與へしあり子孫今に家門と云ふ高一丈
一尺横二間小板葺にて二重屋根あり柱の幅一尺厚五
寸余あり三方に鉄張あり扉を觀音開とて鉄臂あり

神馬屋敷

往古加治木領主より國府郷宮内八幡宮鹿兒島神
社の檢校職を兼て神馬と預り此處既ありしと洪水純
難あり故に島津義弘の命にて加治木の城内に引移
し往古の厩の跡あり故に神馬屋敷の名ありと云今
八幡宮の神宮と一家城内小移して神馬と預り正月
元日八月朔日同十五日の神事に神馬と率行く例あり
此日中間素袍烏帽子あり

日木山村

黒川奇壘 加治木此城主肝付兼演及天文十八年五月
廿九日島津貴久家臣伊集院忠朗と余して討む其時

忠朗、陣營あり今の陣ヶ平と云ふ兼演、壘と相去る
一町許おして其間小川を隔つ數日戦ひ勝負を決せ
を忠朗、火箭を發し兼演、營を焼く兼演、恐れて降る黒
川崎の巖壁に文字余多彫刻しある、戦亡の者共の姓
名ありとて今磨滅して讀む、つうら陣ヶ平と六十年
許以前小陸田に開きし時、鋏或、槍刀此類多く堀出せ

しとと

應永の應永

土器園壘 應永年中富山修理亮直頭、陣營あり島津氏
久兵と率い夜に乘して急、其營を襲ふ直頭大に敗れ
僅に身と以て免れ又土器園の名、慶長此比歸化の朝

鮮人此地に居住して陶器を業とせし跡あり故にて
近古までい山下に民屋ありて壺屋村と云ひしとと

高原壘 今楠原小作、天文二十三年加治木城主肝付兼
演、菱刈初谷院此畝と防、む為に真幸街道の大小路と
堀切と通路と絶つ真幸、北原又八郎祐兼、兵帖
佐より真幸に飯、に會し兼演城を出て北原、兵と敗
り時に一騎川岸と遁を行く者あり城兵是と逐ふ其畝
麓と左に帯、をき、の箭を放つ、能、に、して遂に取
是、其處を左麓と呼へ、同郷小山田村安ヶ平と遁
々、敵、免、々、事を得つ、故是、として安ヶ平と運

の平と唱へしと葛原粟の此時貴久陣營あり
藏王嶽ガワウタケ 此岳四面絶壁にして平地より孤立に高數十丈

周囲も又数十丈あり根も頭も同じ程小て巖少し尖り

其形状奇小して稍男根小類せり藏王の名義詳ならず

梅ヶ谷 藏王嶽の西麓あり溪澗あり清泉岩間より湧出

つ水勢壯てふと近衛信輔公配流せり此所に在りし

時是を賞して常に硯の水に用ひらせしと又此坊の

酒屋とも此水もて酒を製り其酒を梅ヶ谷と名付く

高井田村

春日神社

奉祀 天照大神 天兒屋根命 武甕槌命

齋主命 神体 木像

社地の四面水田小て中に川あり即春日川と云ふ眺望

いとよし鳥居あり神社近三町許あり左右櫻あり寛弘

三年藤原経平 経平事跡い加治木 此地に來り加治木郡

司大藏大夫良長り家と継父南都春日神社に藤原家此

氏の神あり故に神霊を迎祭し畚田三十余町と寄附

して年中十二度此祭祀ありしと豊臣秀吉公加治木と

天領と成せし時祭田をへて没収し神社久しく瘡壞し

ありと慶長十年島津義弘再真して祭田十五石と寄附

春日神社



島津家久また修葺と加へ崇敬せしと祭田又官に収
め社殿久しく壞れ多し天明六年國守厄年の祈禱に
正殿舞殿拜殿其外隨神社華表に至る迄加治木領主新
建せり然りと文化十三年三月六日宝殿より火災ありて
灰燼と成り文政五年又造立ありて神像其外を以て
復てぬ當郷の總鎮守なり

末社

○日吉神社 祭神近江國比叡神社に同じ
○雨止宮○荒人神社 祭神詳なき以上三社本社此
西掖より東と河岸崩れ本社宝殿此内へ安置せり也

と

○若宮神社 本社の東掖より往昔加治木氏嫡男繼
母の讒言によして害せり其灵を崇むと云ふ寛永十
五年島津家久新建ありしと祭日九月十九日あり

春日川 竜門の瀑布此下流にして網截川の上流なり春
日、神社の傍を流る故小具名を得多し川の幅十間許
底ハ真砂にして深かく行人歩渉を甚清流なり左右
水田小して四時眺望佳なり

高倉八幡神社

奉祀三座 應神天皇 仲哀天皇 神功皇后 神体木

往古加治木の領主國府郷宮内八幡宮鹿兒島神社也檢校職と

掌りし時の創建ありと云ふ年月詳かりしを上古ハ祭田

餘多ありて祭祀九月九日十一月廿九日ありしを今十

月廿九日あり今此地小宮田と唱ふる田地ありて古

ハ此神領ありしよし云へり

木田村

岩野原 天文二十三年八月二十九日蒲生範清リキヨ谷院良

室菱刈隆秋タカキ入來院某等兵と會し加治木と攻む城主肝

付三郎五郎兼盛細掛橋に迎へ戦ひ敵と敗る時に清水

島津 曰所姫木 伊集院 忠朗 國府郷長濱 梶山 幸久 同所宮内 鹿兒島 神社の

社の兵馳せ續き肝付と助りて市場に長土村 地名戦ふ九月

十二日島津賁久鹿兒島より兵を發し怡佐比敵と討て

加治木と救小敵圍を解ふ怡佐に退く萬盛、兵火を放

ちて西別府村と燒き此時怡佐 敵數人と斬る清水の兵

走太兵衛加治木の兵竹原外記戦先以諸軍進みて怡佐

の境に至り岩野原に戦ふ島津忠將タカシ是に會と又弘治元

年三月二十七日忠將兵と岩野原に屯して怡佐本城を

攻むとに忠將、兵怡佐高樋口に於て敵一人と斬り一

人と擒りして飯り敵逐て岩野原に來る忠將其弟左兵

衛尚久と共に是を敗り怡佐高尾城下より追討と怡佐 本城

の大手
口より

江夏友賢墓

實憲寺此旧地所在正面に黄翁溪先生江

夏氏墓と誌し左に脇に慶長十五年庚戌七月二十三日

とあり友賢の姓黄氏にて明國江夏の産なり皇朝に歸化

して初め薩摩國高城郡川内ガイに寓居し後に加治木に移

り其家易と傳へて友賢其道に通達は鹿兒島及び國府

加治木等の城と築し時友賢を命して吉山と占り志め

しと云ふ其名高く世に聞え多 禁庭より著先生の号

■と賜ひいとを

五老峯

中央からと中、峯、具、南からと岩、峰と云ふ此西北

小又西峯ありて西からと烏帽子峯北からと猫峯と云

烏帽子峰と猫峯と、其形状に因て云へるなり又岩峯

の頂小大から巖ありて高四丈許、周圍五丈余あり新石

と名付く是を合せて古来より五老峯と云ふ四方水田

小て高百間余周圍一里許あり

上別府川

怡佐郷上別府川の下流なり川の幅三十間余

深一丈許にて舟渡しあり海口近十町許にて舟船往來

に怡佐加治木此境あり

小山田村

龍門司リウモンシ燒

陶器所竜門司の坂中からる故に陶器此名と

以慶長年中飯隆の朝鮮人金海芳仲二人日木山村に住居し陶器を製して業として芳仲り子氏と山元と改め尚陶器を業とし後に焼物場を今の地に移せしとて芳仲の子孫連續して世々陶器此首領なり古帖佐焼として茶人耽ふ陶器の此傳りて帖佐の巻に審かり

龍門瀑布 網掛川の上流にて網懸橋より東北半里許水源の溝邊の山中諸所より合流を高二十四間余濶十間余あり水勢壮大にして美景具に述難し夏の水上を分ちて水田の注ぐ故に水勢少く三篇或は四篇に分せ落つ其景また奇觀あり此瀑布左右上下樹木なく前面又

水田のまゝの深山幽谷かりに似て甚陽氣なり往古唐人此を見て彼方の竜門瀧に似たりと云しより瀧此名と成せりよし土人傳稱せり西遊記に隅州加治木の北に龍門の瀑布と名付し瀧あり予漫遊の間に見多り瀧のていし是を第一と云然きとも格別れ遠土あり其名はとに知る人かし惜むべしと記す

○梅城 加治木本城の外郭なり西南北曲輪あり本城へ此通路あり又東北の曲輪あり水の手へ通路ありとて
○樋廻砦 同村あり加治木城の砦あり本城の北の方三町許にて壘跡あり

龍門瀑布



西別府村

○牧馬苑

島津義弘秘藏せし名馬と膝突栗毛と云ふ此

馬にて此牧の産なりと云ふ八十余歳小して死を怡佐

亀泉院に墓所と怡佐の巻に詳かり

錢屋町

當郷の市中にて今新町と号に天正年中より寛

永十三年丙子六月四日迄此所にて錢と禱と是を加治

木錢と呼へ其形状文字今傳はり此車當郷此記録

錢と禱とり者此後裔と二木鼻と云ふ今同所蒲生田町

に任に其家に大石二ツ所を其面廻り一尺余深五寸許圓

く穴を鑿ちり地金を粉にとるを為の器物なりしと

云ふ

物産

土石 桃木石 西別府村桃木野に産に因て名を得と

石碑佛像墓石手水鉢等に用ひて佳し其色紫黒其質潤

密にして柔なり因て精密なる細工といへとも更に欠

る事かし數百年此久しきに堪り叩々け磬の聲あり俗

に加治木石と呼ふ西遊記に曰大隅國の石ハ密かきと

鉢石碑佛像皆此石を用ふいと柔なり彼國石燈籠或ハ手水

地施に五百年近き石塔を由見と已薩摩琉球等石碑小

器用陶器 龍門司焼と号に朝鮮傳あり

樹木 樟 桐 楮 日楮 楠 羅漢松

飛禽 雉 山鶏 鴛鴦 鴨

鱗介 鱈魚 黒川崎の海中に多く産と此地の絶品なり

棘鬣魚 鱸 鱖 鮠 鮪 鯉 金線魚 黄鰻

章魚 烏賊 龍蝦 鶏魚 香魚 鰻 亀



